

# 認知症グループホームにおける 終末期介護に関して



～利用者お二人を看取って～

医療法人あいち診療会  
グループホームいろり庵 野瀬真孝



## はじめに

認知症介護の切り札、といわれるグループホームであるが利用者の終末期を迎えるにあたっての対応についてはあまり議論されていない。

今回、我々グループホームにおいて二名の利用者の終末期介護を経験したので報告する。



## 事例 1

○氏 92歳 女性 認知症 慢性心不全

2006年9月腹膜炎発症

重度心不全及び腎不全、認知症等諸症等を考慮、外科的介入は困難との結論に達する。

約3ヶ月におよぶ闘病生活をへて同年11月末日 腹膜炎にて他界



## 本人の希望

- 最期は自宅よりも皆（グループホームの友達）に囲まれていたい。寂しいのは嫌。
- 死ぬ前に自宅の仏壇を拝みたい。

## 仲良しの利用者とお昼寝

一番仲の良かったY氏がO氏が退屈しないようにと、隣に来られ毎日話されていた。







## 事例 2

A氏 88歳 女性 認知症 慢性心不全  
2005年6月1日グループホーム入所して  
から大病なくおおむね元気に過ごされる。  
2006年～2007年の大晦日から元日まで  
で自宅で娘らとともに過ごす。  
1月5日朝、急変しそのまま永眠される。

## 娘と水族館へ

亡くなる前日も  
元気でこの日と  
同じ穏やかな笑  
顔を見せてくれ  
ていた。





## 職員の懸念

○氏の終末期、本人の希望で居間が見渡せる畳の間で最期を迎えた。

一利用者の最期を他利用者は否応なく見なければならなくなった。

心の整理をつけていた職員とは違い、他利用者らの精神状態、心理状態が懸念された。





## 考察

他利用者は思いのほか冷静に死を見つめていた。当然、泣く者、落ち込む者、目を背ける者などいた。

しかし利用者全員その死に際し、取り乱すことなく、冷静に受け入れられ、落ち込みそうになる我々職員に優しくしてくれた。



## まとめ

我々はグループホームで看取りを行なうことは利用者の安心に繋がると考えている。「最期まで」となると、利用者と職員との間に絆が生まれ、より良いケアを日々考えて行動できる。

これからも利用者が住み慣れた地域で安心して最期を迎えられるように努力を怠らないようにしていきたい。